

あることとないこと。ありえたこととありえなかったこと。

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学経済学会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 文彦 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2001459

小特集：コンヴァンション理論特集

あることとないこと。 ありえたこととありえなかったこと。

橋 本文彦

「Aは黒、Eは白、Iは赤、Uは緑、Oは青」 ランボー 母音

はじめに

本論では、コンヴァンション理論¹⁾を手掛かりとして、私たちの社会への制度分析のみならず、およそ私たちが世界を実験・観察、あるいは分析することによって知ろうとする、一般的な物事の在り方について、後述するような二つの段階を経て考究することで、これまでの議論で隠されてきた問題を明らかにし、また今後の私たちの研究方法論を探ろうとするものである。

その第一の段階は、あることと、別のあることが結びついている、ということに対する観察と経験からそれを「必然である」と考えるのは、誤解であるということを示すことである。もちろん、このように文章の形で指摘されれば、このことを私たちは「よく知っている」と答えるだろう。しかしながら、現実には私たちが、往々にして観察された「あること」をもとにして、その原因を問うたり未来を予測したりすることが如何に多いことか。それに対して、観察された「あること」の背後には、「実際には起こっていないが、ありえたこと」が存在している場合が多くあるにもかかわらず……。

すなわち、私たちが目にしている世界には、「偶然」または「恣意」によって観察されている物・事²⁾があり、その事象が実際に生起する前には、現在私たちが観察している世界と同様の確からしさで、別の世界——つまり、私たちが観察している事象が生起せずに、私たちが観察していない事象が生起している世界——となっていた可能性もあるということである。

この場合、とくに因果関係について考察する場合を考えてみればすぐにわかるように、私たちの探求が、現実には観察される「あること」のみを基準に行われていたのでは、世界の真の（因果関係の）構造を知ることはできない。

もちろん、かような議論がこれまでに全くなされてこなかったわけではない。哲学における

1) ここでは、P. Batifourier (2001) によって紹介された一連の理論的探究を指している。本論は、同書の翻訳 (2006) を利用している。

2) L. Wittgenstein (1922) では、本論第三章でも示すように、全く適切にも「世界は物の総体ではなくて、事の総体である」と指摘されている。

真理論での「整合説」や、数学における「公理主義」のように定義が互いに矛盾しなければ（整合的であれば）それでよい、とする考えがあり、それに対する批判として、説明が整合的であることと、「真にそうであること」の間には差異があるとする議論がなされてきた。古くはアリストテレスの真偽の定義³⁾、近代では A. タルスキの「対応説」⁴⁾がある。極めて大雑把な言い方をすれば、「整合説」は、後に述べるような多くの可能世界の一つとしてこの世界をとらえようとするものであり、「対応説」はまさに現在あるがままのこの世界を記述しようとするものである⁵⁾。

私たちは上記のような二つのアプローチをとりうるが、私たちが生きている世界のさまざまな事象の「因果関係」や「必然性」を考えるときには、「現在あること」だけではなく、むしろ「ありえた」ことをすべて合わせて考えることによって始めて、その構造を探究することが可能になると考えられる。

本論では、第一章で言語におけるコンヴァンション、第二章でゲーム理論におけるコンヴァンションをその適用例として扱った上で、第三章であらためて D. ルイスの「可能世界」という基礎的な概念に立ち戻って検討を行う。

しかしながら一方で、第二の段階では、上述のように「あることと、別のあることが結びついているのは、まったく偶然的・恣意的であり、論理的に等値な関係で、「ありえたこと」がある」、と考えることもまた、別の新たな誤解を招くことを示すものである。

たとえ本来的には論理的に等値な事柄であろうと、それが実際に扱われる現実の世界においては、あることと別のあることとの結びつきは、或る人々にとっては、それ以外の事柄との結びつきに比べて、「より自然である」ということは、またありうるからである。その「自然さ」はその結びつきが語られる文化・時代によって陰的に、しかし強力に示されているのである。

つまり、私たちが観察する世界は、実際に私たちがそこに暮らして経験している世界であり、そこでは、本来偶然的で恣意的でしかなかった結びつきもまた、この世界で暮らす私たちによって自然に選択されてきた結びつきによるものなのである。私たちは、その「自然さ」によって、現実のあることを「浮かび上がらせている」コンテキストを分析するという作業を残しているのである。

3) Aristoteles, *Metaphysika* Γ 巻によれば、「そうであることをそうでない、といい、そうでないことをそうである、というのは偽であり、そうであることをそうである、といい、そうでないことをそうでない、というのは真である」(筆者翻訳)。ただし、「ある」を意味する *eisin* は、英語の *be* と同様、「存在する」とも訳することができる。

4) A. Tarski (邦訳 1986) では、「雪は白い」という文は、雪が白い時、かつそのときのみ真である。という形で「真」が定義されている。

5) Aristoteles の「偶然と必然」に関する立場として、Anscomb (邦訳 1992) は次のように解釈している。「アリストテレスの論理学のうちで今日学者的関心事に止まらない唯一の部分は、未来に関するある言明が「偶然的」なのに対して、過去と現在に関するすべての真なる言明は（「可能的」と対比された名辞の或る特定の意味において）「必然的」である、とする彼の理説である」

しかしながら、私たちは、「論理的に等値な、どの事象の現実との結び付きも恣意的であり、かつ現実のものが自然である」からといって、すべての問題を解決した気になることはできない。なぜならば、第三章で扱う「可能世界」のように、「論理的にはどこかに存在しているともいえる⁶⁾が、私たちが決して直接出会うことのない世界」とは異なり、私たちが暮らす世界には、いずれもその集団の内部では整合的で自然であるが、他の集団とは互いに矛盾する結びつきが現実存在しているからである。

本論の第四章では、このように互いに矛盾する結びつきが、いかにして生じているのかを理論的に明らかにしたうえで、(比喩的な意味であるが) 現実の世界で実際に現前している複数の可能世界の衝突の問題を扱う。最後に、それぞれの(現実の)可能世界の中に見られる「自然さ」同士がどのようにして相互に了解可能となりうるのか、その可能性を探ることになる。

第一章：言語をめぐるコンヴェンション

まずは、言語をめぐるコンヴェンションから検討を始めよう。

なぜ、言語がコンヴェンションの最初の問題になるのか？

それは、現実私たちが経験する事柄(言語)の由来が明らかでないところで、観察されている事柄をもとに、その由来(本来性)を問うことができるのか、あるいはそれらが単なる恣意的・偶然的なもので、経験している事柄(言語)をいくら調べてもその背後の因果関係といったものは出てこないのか、という問題を人間の歴史上きわめて早い時点から扱ってきたからである。別の言い方をすれば、人々が、自分が「規則」に従っていることを意識しながら、その規則の由来を探求しようとした最初の対象が言語であるとも言えるからである。

実際、言語(単語)の起源の「本来性」と「恣意性」を争う議論は、少なくとも紀元前400年ころにまでさかのぼれるからである。

また、この「本来性」の問題ゆえ、「ある言語と別の言語でみられる「差異」はどのようにして生じるのか?」「ある言語と別の言語とでは、どちらがより事物の本質を表しているのか=優れているのか?」という問いが立てられてきたからである。

このような問いは、後に本論が扱う「ある文化圏で定められた規則と別の文化圏で定められたルール of the two which is more essential?」といった問いにつながるものであり、コンヴェンションの問題の最初に言語について考察することは重要なことであると考えられる。

6) D. ルイス自身は、私たちが住むこの世界(現実世界)以外の可能世界のすべてが、抽象的な意味や概念的な意味ではなくて「実際に」存在していると主張している。このために、私たちの世界のXという事物は別の可能世界ではXではありえず(同時に異なる二つの場所に同じものは存在できないから)X'という別の(しかしXと十分に類似した)事物であると主張する。詳しくは、第三章で検討する。

最初に、古代ギリシャで行われていた議論を確認しよう。

プラトンの「クラチュロス」篇において、ヘルモゲネスは次のように語る⁷⁾。

「しかし私には、取り決めと同意以外に何か名前の正しさの基準があるとはどうしても思えないのです」

これに対するソクラテスの答えは⁸⁾、

「したがって、名前の付け方にも、良いものと悪いものがあるはずである。名前の付け方がよいとは、それぞれの事物が、その本性にふさわしい仕方では区別されるということである。名前はたまたまの取り決めである、という以上のことが、このことには含まれているのではないだろうか」

というものであった。

ここでは⁹⁾、ソクラテスは、事物と名前との結びつきを本性的で自然なものとしてとらえており、これに対してヘルモゲネスは、単に「取り決めと同意」でしかない、と考えている¹⁰⁾と解釈されている。

さらにこの後、ソクラテスは、ホメロスを引き合いに出しながら、(ホメロスによれば)神々がカルキアスと呼び給い、人間たちはキュミンディスと呼ぶと語っている、あの鳥が、なぜキュミンディスと呼ばれるよりも、カルキアスと呼ばれるほうが正しいのか、を知ることは大切な研究である、という。さらには、オレステス(山の男)という名前の人間は、その本性が野獣のように残酷で野生的で山岳的なことをこの名前によって表示しているのではないかとたたみかける¹¹⁾。

言語(単語)と指示対象の結びつきについての議論は、これ以降、2300年にわたって続き、「なぜある対象はその名前と呼ばれるのか?」という問題が、常に投げかけられてきた。その流れは、プラトン以降、アリストテレスからトマス・アクィナスを経て、哲学では G. フレーゲ、L. ウィトゲンシュタインへと通じ、言語学では F. ド・ソシュールへといたる。

20世紀になってようやく、この(ソクラテスが主張した)「事物と名前との結びつきは本性

7) Platon, Cratulus 384D-385A.

8) 途中の会話は省略してある。

9) このあと、ソクラテスは同様に「事物と名前の結びつきは本性的である。したがって、名前を知りそれを調べれば、事物の性質を知ることができる」と主張するクラチュロスに対しては、「しかしながら、これらは「表現」と呼ぶべきもので、名前を知ったからと言ってその事物の性質を知ることとは不可能であろう」と述べている。

10) 上に示したような、クラチュロス篇後半の対話をもとに、そもそもソクラテスは「名前と事物が本制的に結びついている」と主張しようとしたわけではない、と考える研究者も(現代には)多い。

11) Platon Cratulus, 394E.

的である」という主張は、ソシュール¹²⁾によって明快に否定されている。

ソシュールは、私たちの言語活動をその総体（ラング）と使用（パロール）に区分した上で、ラングは更に、「シニフィアン（意味するもの）」と「シニフィエ（意味されるもの）」の一対性の体系として規定され、このシニフィエとシニフィアンとの間には必然的な関係は存在せず、まったく恣意的な結びつきしかないとした。

簡単な例をあげれば、私たちが「猫」と呼ぶあの対象（シニフィエ）を「猫」というシニフィアンと結びつけるか、「キャット」あるいは「カツツェ」「シャ」といった別のいずれかのシニフィアンと結びつけるかは、まったく恣意的であり、それらの結びつきは、ただそのシニフィアンが、同じ言語の中で他のシニフィエとは結びついていない、という差異性という点にだけ意味がある、としたのである¹³⁾。

このような考え方は、すでに示したように、それ以前の、（つまり、ソクラテス以降の）言語学の大きな部分を「無意味な研究」にしてしまった。すなわち、ある事物・事象が「なぜ」ある言葉・単語で呼ばれるのか、という問題は「解決」を見ることがないままに「解消」されてしまったのである。

これは同時に、本章の最初に示した問いのように、複数の言語を比較しようとした場合に、同じ対象（脚注でも示したように、分節自体が異なるために、『同じ対象』という概念すら成立しない場合もある¹⁴⁾）を指す複数の単語のどちらがより「正しい」「自然な」結びつきであるか、という問題も解消してしまったのである。それぞれの単語は、それぞれの言語内で異なった対象に対して異なったものが用いられている限りにおいてすべて「正しい」「自然な」結びつきなのだから。

G. フレーゲ¹⁵⁾は、論理哲学者の立場から言語の意味を考察して、言語において対象をさす *Bedeutung* と、対象を指し示すその指し示し方を *Sinn* と呼んで区別している。たとえば彼は、「ヘスベラス¹⁶⁾はフォスフォラス¹⁷⁾である」という文を分析する。ここで、「ヘスベラス」

12) F. de Saussure (邦訳 1972) 周知のように、本書はソシュール自身によってまとめられたものではなく、彼の講義を受講した学生の講義ノートである。現在では、本書に記述された重要な部分がソシュールのオリジナルではなく、受講者の C. Bally らによるものであることも知られているが、本論ではこの問題には触れない。

13) ソシュールの主張を正確に言えば、シニフィエとシニフィアンは単に「もの」と「言葉」ではない。世界は言語によって初めて分節（世界の切り分け）がなされるのであり、「猫」というシニフィアンが指し示すところのシニフィエと、「Cat」というシニフィアンが指し示すところのシニフィエは同一ではなく、それぞれがその分節化によって切り分けている対象である。

14) 例えば、よく知られているように、ある言語では「雪」をさす単語が一つしかないが、別の言語では「みぞれ」「あられ」など複数の単語で分節される。このため、「同じ対象」という概念を用いる場合には、すでに特定の分節が前提されてしまっていることになる。

15) G. Frege (邦訳 1987)。

16) 明け方に東天に見える明るい星。明けの明星。

17) 夕方に西天に見える明るい星。宵の明星。

は明け方に東天に見える明るい星のことであり、「フォスフォラス」は夕方に西天に見える明るい星のことである。

実は「ヘスベラス」と「フォスフォラス」が指し示す対象は同一である（金星である）が、もちろん「明け方に東天に見える明るい星」が、すなわち「夕方に西天に見える明るい星」だというわけではない。「東天」は「西天」と同じではないし、「明け方」と「夕方」も同じではないからである。

フレーゲの分析によれば、明けの明星という言葉の *Bedeutung* は金星というあの星であり、同様に、宵の明星という言葉の *Bedeutung* も金星であるが、それが明け方に見える明るい星であったり、宵に見える明るい星であるという「指し示し方」が *Sinn* であるとされる。

この分析は、ソシュールのシニフィエとシニフィアンとの関係と（もちろん、細部は異なるが）大まかな意味ではパラレルであり、言葉の指し示す「対象」とその「指し示し方」を区別することの重要性が、20世紀においてようやく明らかにされたということになる。

しかしながら、それでもなお、人は自らが使用している単語を「自然」と感じているのは事実であろう。日本語を母語とする者にとって、「湯」という言葉は「Hot Water」という言葉よりも自然に聞こえるのではないだろうか。たとえそれが、ソシュールの言うように「どちらの単語でもかまわない」ということを知っていたとしても、である。

この「自然さ」の観点については、本論の第四章でくわしく議論することとなる。

さらに時代を進めると、ウィトゲンシュタインは『哲学探究』¹⁸⁾の中で、私的言語の可能性について議論しており、そこでは「私的言語というものは存在しえない」と主張している。（哲学研究における）ウィトゲンシュタインによれば、言語はその定義上「私的」なものでありえず、共通に理解されたルールを持たなくてはならない。このことは、世界を記述する際の言語の役割の重大さ（または、そもそも言語で記述することで初めて世界が成立する）を示すものである。

S. クリプキはその著、「ウィトゲンシュタインのパラドックス」¹⁹⁾において、ウィトゲンシュタインの私的言語の問題を、次のように解釈した。「私たちは言葉を用いて何かを意味することなどは一切ありえない」これがパラドックスである、と。

クリプキの根拠は、ウィトゲンシュタインの「哲学探究」201節の「これがわれわれのパラドックスであった——規則は行為の仕方を決定できない、なぜならばどんな行為の仕方も規則と一致するようにできるから。答えはこうであった——なんでも規則と一致させることができるのなら、それは規則と一致しないようにもできるのだ。だから、ここには一致も不一致もないことになる。」である²⁰⁾。

18) L. Wittgenstein (1953).

19) S. A. Kripke (1982).

20) ただし、ウィトゲンシュタインの実際のテキストは、そのすぐ次のパラグラフに「ここに誤解がメ

すなわち、私たちはすでに成立している言語の規則に従い実践することで他者とコミュニケーションをとれる、という「現実」に成立している出来事」においてはほとんどの論者の一致を見るが、その規則がどのような由来によるものなのか、その規則に従わずに、私的に別の規則に従う、ということが理論的に可能なのか？ あるいは、「私的」が拡大して、別の規則に従う「集団」は、すでに規則を持った集団の中で成立しうるのか？ さらに、そもそも規則に従うことによって、「いったい何を伝えることができるのか？」という問いは、まだ開かれたままなのである。

私たちは、コンヴァンション理論を考えていく際の手がかりとして言語の問題からその取り組みを始めたが、いまや逆に、言語の問題をさらに探求するためにもコンヴァンションのアプローチに耳を傾けなくてはならない。これらは双対的な関係にあるといえる。

第二章：ゲーム理論をめぐるコンヴァンション

von ノイマンとモルゲンシュテルンによって構築された「ゲーム理論」は、複数の戦略的選択肢が与えられた際に、「相手の行動を予測しながら」自己の行動を決定するというものである。

この際に、「相手の行動を予測する」とは自分が相手に与えられた情報がどのようなものであるかを知っており、相手もまた自分と同じ程度の合理性を持っている場合に、相手が取べき選択肢を予測する、ということである。

すなわち、ゲーム理論を論じる際に、コンヴァンションの考え方が重要となるのは、論理的に相手の行動を予測しきれない場合にプレイヤーが取べき行動と、それが何らかのコンヴァンションによって（こちらら論理的ではないが）予測可能な場合にとるべき行動とは必ずしも一致せず、コンヴァンションによる予測を用いて選択する方が、集団全体の利益を大きくする可能性がある、という点である。

また、いったんコンヴァンションに基づいた選択決定がなされると、いくつかの戦略場面では、プレイヤー（意思決定者）は互いにその解から一方的に逸脱することに自己の利益が伴わない、という事実のためにコンヴァンションは当初よりもさらに強固な意味をもつようになるのである。

これらの点について、具体的なゲームの場面を例に挙げながら確認していこう。

まずは、もっとも単純な例である。

「あることは以下のことから明らかである」とされており、さらに「よって、規則に従うということは、一つの実践なのである」といわれている。このため、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈は（意図的かそうでないかは別に）「誤読である」と考えるのが現在の主流であるが、一方でウィトゲンシュタインが「誤解」とした考え方もまた、現時点までに決定的に否定されたわけではない。

例 1 :

二人の人間 (XとY) が、待ち合わせ場所を定めずに会わねばならず、連絡の方法も無い場合に、その候補としてAとBとがある場合を考える。この場合のペイオフマトリックスは次のようになる。

	A	B
A	10/10	0/0
B	0/0	10/10

すなわち、待ち合わせ場所がAであるか、Bであるかには関わりなく、両者が一致している場合には最大の利得（出会うことができる！）を得ることができ、一致していない場合には最小の利得（すれ違い）しか得ることができない。

このように、二人の人間XとYとが、待ち合わせ場所としてAを選ぶかBを選ぶかについて、「論理的に正しい」選択肢を与えられていない場合に、現実問題としてXとYはそれぞれどちらの場所に行けばよいのだろうか。

もしも、Aがオフィス街の中にあり、Bがカップルの名所であれば、二人がビジネス上の友人であるなら、Aを選択するのが望ましいだろうし、もしも二人が恋人同士であるならば、Bを選択するのが望ましいであろう。これらの場所の選択は、彼等自身の論理的選択というよりは、彼らの属する集団の一般的な振る舞いに双方が従う、という形で選択され、その結果として最大の利得を得ることができるようになるのである。

例 2 :

利得行列がほんの少し複雑になっても、状況は同様である。

	A	B
A	20/20	0/0
B	0/0	10/10

もしも、二人がビジネス上の友人であり、Aで待ち合わせたほうが都合がよいが、Bが近距離にあるような場合、二人の双方がBで待ち合わせることになった場合でも、BBという解はパレート最適ではないにしても、ナッシュ均衡となっている。したがって、BBという準最適解は、十分に二人の選択の解となりうるのである。

例 3 :

さらに、バティフリエらも例として示している鹿狩りゲーム²¹⁾はより複雑な要素を含むが、

21) よく知られたゲームの一つで、鹿は二人一緒にないと狩れないし、一人では致命的な危険を伴うが、栄養は大きい。兎は一人でも狩ることができるが栄養が小さい。例3では、利得表の値は、バティフリエに拠った。

例2と同様に考えることができる。

	鹿	兎
鹿	3/3	-10/1
兎	1/-10	1/1

「鹿・鹿」の組み合わせにいたるのが、明らかに最適ではあるが、一般に人が「大きなリスクを避ける」ならば、「兎・兎」は十分に魅力的な組み合わせであり、ナッシュ均衡である。

例4：

さて、本論第四章を先取りして、次のようなゲームを考えてみよう。

ここでは、私たちが「猫」という語で呼んでいる対象（シニフィエ）に対して、それを「猫」という語で呼ぶか、「Cat」という語で呼ぶかを選ぶゲームである。

ただし、二人のプレイヤーの間に選んだ語が異なるときは、互いに意味を理解することができないということと、一方のプレイヤー（縦列のプレイヤー）にとっては、「猫」という語がより自然な語で、他方のプレイヤー（横列のプレイヤー）にとっては「Cat」がより自然な語であると仮定する。

	猫	Cat
猫	5/2	1/1
Cat	-3/-3	2/5

すると、ここでも「猫・猫」の組み合わせと「Cat・Cat」の組み合わせはパレート最適で、かつナッシュ均衡をなしているが、「公平性」という観点から見ると、上記の組み合わせはいずれも一方に対してのみ低い利得となっている。

プレイヤーが二人のみの場合には、しかしながら「猫・Cat」の組と「Cat・猫」の組は現実には全く役に立たない解であるが、プレイヤーが二つの集団で、それぞれがすでに「猫」という語を自然に用いている集団と「Cat」という語を自然に用いている集団の場合には、「猫・Cat」という、「そもそも翻訳は行わないが、公平である」という組を解とすることも可能となる。この点について詳しくは第三章と第四章とで扱う。

私たちは、「進化ゲーム」の理論を導入することで、さらに次のことを確認することができる。

まず、先の例1において、二人の待ち合わせ場所としてAが選択されたとする。ここに、三人目のZが現れて、「理論的には等値である」という理由からBを待ち合わせ場所として選択することは可能であろうか？もちろん、「否」である。いったん二人の待ち合わせ場所としてAが選択されたならば、XとYは、（取り決めによって同時に選択を変更するのでない限り）待ち合わせ場所をBと変更することは自分にとっての不利益しか招かない。同様に、Bを待ち合わせ場所としようとするZの参入によっても、XとYとはそれぞれ選択を変更しないほうが

大きな利得を得ることができるからである。

これは、S. J. ゲールドが導入した ESS (進化的に安定な戦略) であり、「もし集団の全員がその戦略を採用していれば、突然変異によって侵入してくるほかのどんな戦略をとる個体でも、自然選択の力によって排除できる」というものである²²⁾。

この章の最後に、よく知られた「囚人のジレンマゲーム」を考察することで、私たちの今後の方向性を検討する材料としよう。

例 5 :

	協力	裏切り
協力	5/5	-10/10
裏切り	10/-10	-5/-5

このゲームでは、「協力・協力」は ESS としては維持されない。なぜなら、この解が成立するなら、自分が一方的にそこから乖離して「裏切り」を選んだほうが利益が増えるからである。つまり、それぞれのプレイヤーが、もしも一回だけしか戦略選択を行わないならば、「裏切り」だけが ESS 戦略となる。

しかし、よく知られているように、ラバポート²³⁾の TFT 戦略²⁴⁾は、アクセルロッド²⁵⁾のトーナメントにおいて ESS であることを示した²⁶⁾。

私たちは、ある種のゲームにおいて、ESS となる戦略を選択することで安定的なゲームを行うことができる。一方で、同様のゲームには唯一の ESS だけが存在するとは限らず、複数の ESS が解として存在する可能性があり、これらの ESS のうちのどれが、「現実」に ESS となるかは、まったく初期条件に依存しており、その初期条件にしたがって、たまたま「十分に多数」の個体が選択した戦略が ESS の一つであれば、それがこのゲーム全体の ESS となるのである。

第三章：可能世界の衝突

D. ルイスは、その著書²⁷⁾において、上記のような言語の構造をもとにしながらも言語の枠

22) J. M. Smith (邦訳1985) P. 11.

23) A. Rapoport (1980).

24) Tit For Tat 戦略。繰り返し型の囚人のジレンマゲームにおいて、自分からは「協力」しか選択せず、相手が「裏切り」を選んだときには、次回に「裏切り」を選択。相手が「協力」に戻ったら、自分も「協力」に戻るという戦略。

25) Axelrod (1980).

26) ただし、TFT だけが繰り返し型の囚人のジレンマゲームにおける ESS 戦略というわけではなく、他にも ESS 戦略は存在する。たとえば、常に「裏切り」という戦略は ESS 戦略である。

27) D. Lewis (1969) Convention.

を超えて、私たちの社会・世界におけるさまざまな規則や行動を「コンヴェンション」の観点からとらえなおした。ルイスが私たちに示した点は二つある。

第一は、世界は私たちが観察している「あること」の集合だけではなく、「ありえたこと」の総集合のうちの一つの場合でしかなく、別の言い方をすれば、数多くの「可能世界」のうちの特定の一つが私たちの「現実世界」である、ということである²⁸⁾。

第二の点は、そのような可能世界の論理的等値性によって、私たちは、決定不能な行為選択の場面において、合理性を保ったままで、そのうちの一つの行為を選択することができるということである²⁹⁾。

たとえば「ビュリダンのロバ」³⁰⁾で知られるような事態については、積極的に一方の選択肢を与えてくれるわけではないが、選ばれた選択肢に合理性を与えてくれる。

ルイスの示した可能世界とその決定の合理性は、しかしながら、一つのジレンマを抱えている。それは、第一章で検討した言語の世界に振り返ってみれば明らかなのだが、論理的に等値な可能世界の中で、いずれか一つの世界が現実となった場合、(そして、第二章で検討したように、ESS となる戦略が複数存在する場合)、それ自体は「正しい選択肢」であるのだが、別の集団(文化・国)が別の選択肢を選び、その結果として、同じ可能世界集合の中から別の世界を現実のものとしたときに、それらは互いに排他的である、ということである。

すなわち「可能世界の衝突」とでも呼ぶべき事態が生じる。

私たちにできることは、可能世界を構成するその背後の対象の同一性(すなわち、シニフィエ)を確認した上で、シニフィアン同士の翻訳(ある現実世界での「右側通行」は「左側通行」と同じ目的・概念で定められている。etc.)を行うことくらいではなのだろうか? しかし、すでに見たように、ルイスによれば異なる可能世界ではシニフィエの同一性は基本的に確保されない。(あくまで類似したシニフィエのみが存在する)³¹⁾。

28) 脚注6で示したように、ルイス自身に従えば、私たちが「現実世界」と呼んでいるこの世界以外の可能世界もまた、単なる論理的な構成物ではなくて、実際に「存在」とされる。一方で、脚注2で示したように、ウィトゲンシュタインは世界そのものを「事」の総体であるとしており、世界は論理空間の一つとして表現される。

29) どの行為も論理的に等値である場合には、私たちはどの行為を選択するかを論理的に決定することはできないが、「それがコンヴェンションである」という理由は、それ以前の根拠を持たなくとも、まさにコンヴェンションであることでその行為を選択することの合理性が与えられる。たとえば、歩行者が道路の右側を歩くべきか、左側を歩くべきか、は論理的には決定できないが、そのように定めてしまった場合、それを守ることは全く合理的であるといえる。第二章のゲーム理論についての検討を参照されたい。

30) ジャン・ビュリダンにちなんだ寓話(ビュリダン自身が唱えたか否かは不明)。「ロバから等距離に等量のわら(餌)があるとき、ロバはどちらを食べるか決定することができず、結局餓死してしまう」というもの。

31) この点について、哲学者の多くは、「すべての可能世界は実際に存在し、したがってそれぞれの世界の構成物は類似はしていても異なる物である」というルイスの主張の扱いに苦慮している。しか

また、あらゆる可能世界を通して共通する要素というものを私たちは本当に探し出すことができるのだろうか？

この点について、デビッドソンは、可能世界の中での「真」とすべての可能世界を通しての「真」について、次のような考究を行っている。少し長くなるが以下に引用しよう。

「神は、或ることがこの現実世界において成り立つよう命ずることができる。だが、神といえども、或ることがすべての可能世界で成り立つように命ずることが、いかにしてできるのか。われわれは、或ることが真であるかどうかの発見に乗り出すとはいかなることか、を知っている。だが、それが真で無ければならないかどうかを発見する過程について、われわれはどんな説明をなしうるであろうか。規約主義に従えば、すべての必然性はわれわれが実際に強いたものではなく、われわれの言語に強いたものである。ある言語が必然的なのは、われわれがいかなるものをもその言明を偽たらしめるものとは見做さないよう選択したことによる」³²⁾。

このように、私たちは複数の可能世界について、そのいずれかの世界に世界を統合するための論理的・倫理的な根拠はなんら持ち合わせていないばかりか、それらの可能世界に共通する特徴を抽出して一般化するための手続きをも持ち合わせていないということになる。

では、私たちは並立する可能世界が現実と衝突する場合に、手をこまねいてみているしかないのだろうか？

雨宮³³⁾の議論が参考になろう。彼は、「可能世界」あるいは“Possible World”という言葉そのものが、すでに私たちが住む現実世界を基準にした、「それ以外の世界」を指す指し示し方をしており、現実世界そのものが他の世界と全く並立して「偶然」生じているとする点が見落とされていると指摘して、「可能世界の使命は、こうした偶然性を成立させるために、現実世界と出会う他者の役割を果たすことにある。可能世界は現実世界を周囲から彩るのではなく、現実世界と直接であうことによって、これを揺さぶり、現実世界に動的相貌としての偶然性を付与するのである」とする。

もとより、ここで雨宮が論じているのは、ルイスオリジナルの「可能世界」であり、本論で扱っているような「比喩的」な意味での可能世界ではないが、この指摘は十分に検討される必要がある。

ゝし、まさに現実の世界を対象として比喩的に可能世界を考えた場合、それぞれの世界（文化・集団）で、社会組織の構成は同じだが、用いられている言語だけが異なる場合や、言語は同じだが採用されている社会ルールだけが異なる場合を考えることはできて、いずれの場合にもそれぞれの世界（文化・集団）を構成する物自体は別のものであるのは明らかである。

32) M. Dummet (邦訳 1986)。

33) 雨宮 (1995)。

第四章：「恣意性」から「自然性」へ

「はじめに」でも述べたとおり、本論の第二の主張は、これまでに見てきた「コンヴァンション」の枠組みを超えて、現実の私たちの世界に現在の（異なる複数の）コンヴァンションをもたらしたコンテキストを検討することの有用性と必要性を示すことである。

すなわちコンヴァンションの枠組みは、「それ自体は論理的・必然的な結果ではなく、ほかにもありうるうちの一つであるが、それを定めることは合理的である」というものであるが、さらに「現実を選択されている選択肢は、他のさまざまな条件の中から『自然に浮かび上がった』選択肢である」ということである³⁴⁾。

これについては、みたび言語の世界を振り返ることが有用であろう。

ソシュールが示した、シニフィアンとシニフィエの結びつきの恣意性は、すでに多くの人から「常識」として受け入れられているところではあるが、R. ヤコブソン³⁵⁾はこのソシュールの考えをさらに一歩進めている。

ソシュールが「ラング」を中心に言語を考察し、そこでシニフィアンとシニフィエとの恣意性を議論したのに対して、ヤコブソンは現実の個別的な言語活動としての「パロール」を問題とした。そこでは、「恣意性」とは、つまり完全な意味での論理的な等値関係を示しているのではなく、そのような中から人間が「自然に」選択する余地を持つという意味で捉えられる。シニフィエとシニフィアンの独立性と恣意性は、それらの結びつきの「自然性」と矛盾するわけではないということである。

このような考え方をあらためて私たちの世界と行動の問題に置き換えてみると、私たちがさまざまな規則を作り、行為の選択肢を選択することの恣意性は、選択が行われるまでの論理的予測不可能性を持っているわけではなく、むしろ私たちがすでにおかれたそれ以外の環境（可能世界の他の論理値）に制約されながら、「自然に」定まってくると考えることができるのではないか？

この考え方は、20世紀以来さまざまな分野で検討されてきている^{36) 37)}。

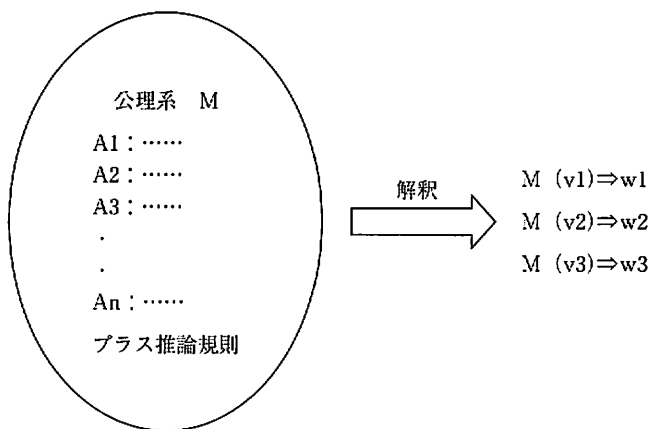
34) 繰り返しになるが、これらの戦略選択は ESS となっている。

35) R. Jacobson (邦訳 1973)。

36) 数学の世界では、これまでのように、私たちが直観的に感じている「空間」がさまざまな性質を持っていたり、そこにさまざまな事物が載っていたりするという考え方よりも、その性質を示し、載っている事物を示すことで、その受容体となるべき「空間」が構成されるという非可換幾何学の考え方が用いられるようになってきている。

37) また、理論とその解釈における、「解釈学的循環」の理論は、(かなり単純化していえば)あるコンテキスト全体の意味は、当然それを構成する単語の意味に基づいて決定されるが、そこに出てくる単語の意味そのものは、コンテキスト全体が定まらなければ、正確な意味を定めることができない。こうして、テキスト全体の解釈とそこに出てくる単語の解釈とは、循環的な関係にあるということができる、というものである。

以上のことを考慮に入れた上で、私たちの住むこの世界を、（現実に出会う比喻的な意味での）可能世界として捉えるならば、次のような模式図によって示すことができるだろう。



ここで、公理系全体をM、一つ一つの公理を $A1 \sim An$ で示す。

公理として何を採用するか、はそれぞれの可能世界で異なっており、それらはそれぞれの公理系Mの内部で互いに無矛盾で、できれば完全であることが望まれるが、すべての可能世界で同一の公理系Mが採用される必要はない。

それぞれの世界で観察される事象 $v1 \sim v3$ （言語の場合であれば、シニフィエに相当する）は公理系Mで解釈されることで、その世界での事実 $w1 \sim w3$ （言語の場合であれば、シニフィアンに相当する）となる。

しかし、この公理系の選択³⁸⁾という「恣意性」に基づいた規則の「(複数の) 自然性」の問題を考える際に考慮しなくてはならない重要な問題がある。それは「アイデンティティー」の問題である。

これまでに見てきたように、「自然な」ルールという点については、二つの言語・二つの規則がいずれも同程度に「ありうる」にもかかわらず、それらが二つの異なる文化において別々に採用された場合、理論的には、その両者のいずれもが「適切な」規則であり、いずれかの優越性を示すものはないはずである。

問題は、もともとは「(初期値による) 偶然的な選択の結果」でしかなかった規則（言語）が、それに慣れ親しむうちに、その規則・言語を持つものとしての「アイデンティティー」を形成してきているということである。すなわち、文化・民族のアイデンティティーは、まさに「それが他の文化と異なっている」ということに基礎付けられることによって、原初の「偶然的差異」が「差異によるアイデンティティーの確認」へと変化してしまっているのである。このことは、すでに第一章で見た言語におけるシニフィアンの役割とも重なり合っている。そ

38) 無矛盾で完全であればよい。別の観点から見れば、ESS であればよい。さらに別の言い方をすれば、これがコンヴェンションであるとみなせる。

それぞれのシニフィアン（シニフィエ）の役割は、シニフィエを差異化することだけであり、シニフィアンが差異を持つことでのみ、シニフィエは分節化される。

つまり、文化・民族・集団というシニフィエは、異なるシニフィアンを持つ集団と同様のシニフィアンを持つことにより、そのアイデンティティーは失われてしまうのである。

実際、タジフェルによれば³⁹⁾、合理的な根拠を持たない場合でも、単に「差異化」することが集団のアイデンティティーを形成し、異なる集団に対して、自分の所属する集団を「ひいき」するようになるという実験結果が示されている。この実験結果はまさに上記の差異化＝アイデンティティーの形成を示していると思われる。

ここまで見てきたように、コンヴェンションそのものは、必ずしも論理的に構築された結果ではなくとも、そのコンヴェンションは ESS となりうるし、その集団（一つの可能世界）に別のコンヴェンションを持つ個体または少数の集団（別の可能世界）が侵入しようとしても、それらは大きな利得を得ることができず、むしろ既存のコンヴェンションに従うことで最大の利得を得ることになる。他方、規模の同等な集団同士が衝突する場合には、互いの ESS は集団の規模とタイミングによってどちらのコンヴェンションにもなりうる形で統一される。その統一そのものは別々のコンヴェンションが存在する場合よりも全体として大きな利得を生み出すものであるが、差異がなくなるということはすなわち、一方の集団のアイデンティティーが失われることを意味する。

では、複数の集団⁴⁰⁾は、全体の利得の増大のために、コンヴェンションを統一するのがよいのか、それともアイデンティティーを守ることで、それぞれの可能世界は互いに独立したままであるのがよいのか？

もちろん、この問いも答えがあるわけではないだろう。

コンヴェンション理論は、私たちにこれまでの疑問を解明する手がかりを与えてくれたと同時に、より多くの解明すべき問題を提示したことになる。

参 考 文 献

1. Aristoteles "Metaphisika".
2. S. A. Kripke "Wittgenstein on Rules and Private Language", 1982.
3. D. Lewis "Convention", Harvard University Press, 1969.
4. D. Lewis "Counter Factuals", Harvard University Press, 1973.
5. L. Wittgenstein "Tractatus Logico-Philosophicus", 1922.
6. L. Wittgenstein "Philosophische Untersuchungen", 1953.
7. 雨宮民雄「現実世界の構成と可能世界の位置」(現代思想 Vol. 23-04 pp. 112-123)。
8. 飯田隆「ウィットゲンシュタイン」講談社 1997。

39) Tajfel (1971).

40) もちろん、以上の定義により、複数として区別される集団は（少なくとも何か一つの）異なるコンヴェンションを採用している。

9. 加賀野井秀一「ソシユール」講談社 2004。
10. 野口良平「アイコン・インデックス・シンボル」立命館文学 Vol.582 pp.309-323, 2004。
11. G.E.M. アンスコム & P.T. ギーチ 野本・藤沢訳「哲学の三人」勁草書房 1992。
12. ジョン・メイナード・スミス 寺本ほか訳「進化とゲーム理論」産業図書 198 (原著 1982)。
13. F. ド・ソシユール 小林訳「一般言語学講義」岩波書店 197 (原著 1916)。
14. マイケル・ダメット 藤田訳「真理という謎」勁草書房 1986 (原著1978)。
15. A. タルスキー 飯田隆訳「真理の意味論的観点と意味論の基礎」(『現代哲学基本論文集Ⅰ』坂本百大編に所収) 勁草書房 1986。
16. フランソワ・エイマール・デュブルネ 海老塚ほか訳「企業の政治経済学」ナカニシヤ出版 2006。
17. P. バティフリーエ編 海老塚・須田ほか訳「コンヴァンション理論の射程」昭和堂 2006。
18. プラトン 水地宗明訳「クラテュロス」(プラトン全集 第二巻) 岩波書店。
19. G. フレーゲ 土屋俊訳「意義と意味について」(『現代哲学基本論文集Ⅱ』坂本百大編に所収) 勁草書房 1987。
20. リュック・ボルタンスキー & ローラン・テブノー 三浦直希訳「正当化の理論」新曜社 2007。
21. ローマン・ヤコブソン「一般言語学」みすず書房 1973。